

LRT導入 宇都宮大きく前進

人と環境にやさしい交通へ

21世紀の都市交通として認知度を高めるLRT（次世代路面電車）—— 都市内は道路上、郊外は専用軌道走るLRTのほか、専用道を通るBRT（バス高速輸送システム）など新しい交通の普及啓蒙に大きな役割を果たしてきたのが、「人と環境にやさしい交通をめざす全国大会」だ。初回の2005年（平成17年）以降、1〜2年ごとに継続され、LRTやBRT導入が構想される地方都市を巡回する形で回を重ねてきた。昨年は11月末に宇都宮市で7回目の大会を開催。市がLRT導入方針を打ち出すなど実現に向け大きく前進した宇都宮の事情を紹介するとともに、地元で旗を振り続けてきた市民団体「雷都レール」としき会員で宇都宮市議の遠藤和信氏に、これまでの道のりを寄稿してもらった。

（上里 夏生記者）

20年来の構想、いまだ実現せず

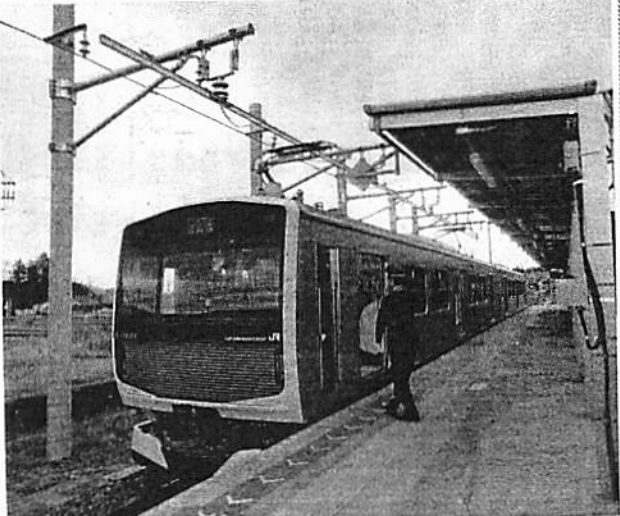


話は20年以上前にさかり、1974年（昭和49）のぼる。旧日本陸軍の「軍（はやぶさ）」などの名義を送り出した。中島飛行機の工場跡地を再開発して宇都宮市東部に造成された清原工業団地。総面積は東京ドーム80個分近い388万㎡に上り、内陸部の工業団地としてには国内最大規模となる。用地造成には宇都宮市中心に栃木県も加わり、総面積は東京ドーム80個分近い388万㎡に上り、内陸部の工業団地としてには国内最大規模となる。用地造成には宇都宮市中心に栃木県も加わり、



約500人が参加した全国大会の市民フォーラム（パネルディスカッション）。大会はLRT導入推進に取り組む雷都レールとしきなど市民団体を中心とする実行委員会が主催し、国土交通省、環境省、栃木県、宇都宮市などが後援した。

栃木の新しい交通 見学



大会翌日は自由参加で栃木の新しい交通を見学した。烏山線と宇都宮線（東北線）の一部区間を走る「ACCUM」＝写真④＝は大容量蓄電池を搭載して非電化区間はバッテリー電力を使いモーターで走行。宇都宮市がJR宇都宮駅西口に開設した「宮サイクルステーション」＝写真⑤＝では、自転車によるまちづくりに向けスポーツバイクやヘルメットを貸し出す。



一部写真協力＝宇都宮市、宇都宮大学都市計画研究室、横浜にLRTを走らせる会

の間に新交通システムを整備するプランだった。東京より遠い。と2006年が実現に移され、いまだ20年以上が経過。通都する多くはマイカー利用で朝夕は通勤が慢性化。東京の本社から宇都宮の工場出張する際、東京駅から都営地下鉄まで新幹線利用で時間短縮するのみに、駅から15分ほどの工業団地まで

「新しいまちづくりの手段」に

公共・商業施設を集める。コンパクトなまちづくりを推進。「コンパクトネットワーク」は国土交通省の地域創生で柱の施策で、宇都宮の場合にはネットワークがLRT、そしてLRTやJR、東武の鉄道に接続するバスとなる。

市の構想では、LRTは施設保有と列車運行を分ける。公有民営による経営の上下分離を採る。基幹路線はJR宇都宮駅と清原団地間約12.5km。先行する富山ライトレールでは、JR富山港線の線路を活用することで建設費が抑えられたが、宇都宮では新規にレールを敷いたり車両を新造しなければならない、と説いた。



JR宇都宮駅からは片側2車線の幹線道路が伸び、仮にLRTを敷設しても道路交通の走行スペースは確保できる

公共交通機能 重要性を説く
山本会長
パネルディスカッションに鉄道の専門家として参加した未来のまち・交通・鉄道を構想



するプラットフォーム（組織は一般社団法人）の山本卓朗会長＝写真一。JR東日本常務、鉄道建設社長、土木学会会長などとして、公共交通が機能するまちづくりの重要性を説き続けてきた。



で隣接する芳賀町の副市庁舎未来のまち・交通・鉄道を構想するプラットフォーム（一般社団法人）の山本明会長を交えてパネルディスカッション。宇都宮教授は「LRTは、水平方向のエレベーター。ビルはエレベーターがなければ機能しない。乗るのにお金を払う人がいない。LRTをまちをつなぐ水平方向のエレベーターと考えれば、必要性も理解されやすいのでは……」

外であたたただけの木を作ります

